

---

# 機械仕掛けの僕たち

青空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機械仕掛けの僕たち

### 【Nコード】

N5636A

### 【作者名】

青空

### 【あらすじ】

もう人がヒトではなくなっていた。最愛の人を失い、手に入れた物は『エンジェイル』という人形だった……。

## 第1章 始まりを告げる悲劇

科学が進んでいく中。

もうどれが『ヒト』なのかさえ、分からなくなっていた。

町を歩けば必ず居る【人形】たち。

それらにはちゃんとした名前がある。

人がヒトを創ったのだ。

世界が絶賛した最初の人形【サリナ】から始まった。

世界的大企業の会社、ドール社が創りあげた傑作。

人のように行動し。

人のように喋り。

人のように個性がある。

ドール社はこの人形達『エンジェイル』を世界的に売り始めた。  
すぐさまこの情報は全国に広がった。

おもちゃ会社はもちろん。

電気会社などもすぐ買い始めた。

自分で顔を選び、性格を創り、言葉、表情、名前、スタイル……。  
人々は追求し続けた。

波紋のように乾いた世界を潤した。

\*

3ヶ月前、最愛の恋人を失った。

「う、そだろ……？」

現実だと知るのに時間などいらなかった。

ああ、もういないんだと。

悲しいというより、寂しかった。

冷えた体がより現実感を増させていった。

「残念ですが」

そんな医師の声さえリアルだった。

「無駄になっちゃった」

一人きりの部屋の中でぼつりと声を落とした。

小さい箱。

開くと真ん中に指輪が寂しそうにあった。

今日、渡すつもりだった物なのに、わたしほんにんがいなくちゃ意味がない。

端無十八はゆっくり息を吐いた。

こんなことドラマの中だけのことかと思っていた。

現実には、しかも目の前でおこるなんて思っても見ないことだった。そんな彼が『エンジエイル』に出会ったのは1週間前だった。

でっかいシヨーウインドウに『エンジエイル』の原型、『ドール』が並べてあった。

様々な顔立ち。

スタイル。

店の中にはいると顔のパーツ、髪が並べてあった。

はたから見れば不気味な後景だ。

そこには、綺麗なガラスケースに入った愛する人がいた。息が止まった。

死んだはずの人がいた。

無意識なまま十八は購入していた。

No.777の非売品『エンジエイル』で、値段も他の『エンジエイル』に比べれば格段に高かったが十八の家には金が有り余るほどあった。

十八は家に帰ってすぐプログラムを入力し始める。

愛する人の名前、行動、言動、そして記憶を入れていく。

【この『エンジェイル』はドール社777体目の『エンジェイル』です。外見は完成済みですが、他の機能は備わっていないので独自で入力してください。

なお、この『エンジェイル』は特殊で、自分が『エンジェイル』ということを知らないのであらかじめご了承ください。……では、貴方の幸せを祈っています】

箱に入っていたデジタル説明書を聞き終えると、箱が自動的に開いた。

綺麗な栗色の髪にガラス玉のような瞳。

まさしく彼女だった。

「おはようございます」

【貴方の幸せを祈っています】

もう壊れていたんだ。

でもどうしても支えがほしかったんだ。

## 第2章 暗い闇の中で光る涙

最悪だ。

寝過ごした。

十八は髪をぐしゃぐしゃにしながらうなった。

「おーいまりやあ！ 起きろってっ」

隣で気持ちよさそうに眠っている恋人を起こす。

「んにゃ？ もー朝？」

「朝？ じゃねえって、はあ。お前本当に朝駄目なんだな」

そっくりだ。

起きるときの変な奇声や、朝が弱いところやなにげに料理上手いところとか全部。

まりやは眠たそうに目をこすりながら朝食を作り始めた。

十八は急いで会社に行く準備をする。

今年でもう23才だ。

しかも、通っている会社はあのドール社、まりやを創った会社。あれからもう半年、か。と十八は眠そうに朝食を作っているまりやを見てほえむ。

最初の時は大変だった。

まだ体が慣れていないのか、慌ただしかったが今では完璧な『まりや』になっている。

「とーやーできたよー」

まりやがキッチンから十八を呼ぶ。

おいしそうなおいが鼻をついた。

料理の腕は『変わってない』な……、と十八はうれしそうにいすに座る。

「んじゃ、いただきます」

二人で手を合わせて食べる。

これもいつもの習慣だった。

時計を見るともう後数十分で遅刻になる時刻だった。

十八は急いで朝食を平らげる。

「いつてきまーす！」

まりやが手を振っていた。

\*

私が生まれた場所は暗くて、暗くて、まるで深い海のようなところだった。

毎日何人かの話し声が聞こえてくる。

凄く不気味な場所。

たまにくすくすした笑い声もしてくる。

「これがN.O.777体目の『エンジエイル』？ 何が特別なんだ？」

少年の声が暗い部屋に響いた。

「綺麗な子だろ？」

そばで私を見ている少年より少し大人な声の青年が答えた。

少年は不服そうな声で反論した。

「それなら、他の『エンジエイル』と一緒にじゃないか！ こんなもののために、父さんはっ」

最後の言葉はよく聞き取れなかった。

青年はしゃがみ込むと少年の頭を優しくなでた。

少年の目には涙がたくさんたまって今にもあふれんばかりで、とても綺麗だったのを覚えている。

「違うよ。彼女はね、とても綺麗な子だよ。他の『エンジエイル』とは違うすっごく純粋な子なんだよ」

大丈夫。君のお父さんは正しいことをしたんだ」  
青年の優しい声も覚えている。

綺麗なガラスケースの中で私は待っていたのかもしれない。  
目にたくさん涙をためてなお、何かを我慢している少年に……  
会いたかった。

\*

「ただいま」

「おかえりつとーや」

まりやは十八に飛びつきながら言う。

その反動で十八の体は後ろのめりになる。

このぬくもりはまさしく『ヒト』で、『エンジェル』という人  
形とは思えなかった。

十八はまりやのぬくもりを感じながら抱きしめた。  
本当に寂しかった。

「とーや？ ご飯さめちゃうよ？」

まりやの不思議そうな声にはつとずる。

「そだな、食べるか」

「うんっ！」

机の上には豪華な料理が並べられていた。  
おいしそうなにおいが鼻をかすめた。

あの日からいつも一人だった。  
広い部屋に立った一人置いて行かれた。



ただいまか之行っても誰も答えてくれない。

帰っても料理なんて無い。

寂しかった。

寂しくて、寂しくて、あの時。

ガラスケースの中でこの『エンジエイル』を見つけたとき死ぬほどうれしかったんだ。

やっと、見つけたんだと思った。

抱きしめたときのぬくもりに十八は安堵した。

いつも側にいる。

俺だけの『エンジエイル』……。

\*

誰がどう考えて創った？

### 第3章 因果は巡る、巡る……

スローモーション。

最愛の人が死ぬ瞬間を、俺は見た。  
でも知らない。

何で死んだんだ……？

気がついたら病院で、医者が居て。  
あれ？

なにも覚えていない。

シヨックだったから、だよな。

\*

目を覚ましたら誰もいない。

そんな夢を見た。

でも起きたらちゃんとそこに君が居るんだ。

そんな些細なことでも幸せになれた。

「まーりや。朝だよ」

起こす相手が居る。

愛しい人がいる。

十八は優しくまりやの髪をなでた。

するりと髪は十八の指をすり抜けた。

生糸よりも繊細で、綺麗なまりやの髪。それは十八の好きな物の  
一つだった。

他にも、どんな宝石より綺麗な瞳。

柔らかくて温かい肌。

優しい笑顔。

十八はその一つ一つを触れて確かめた。

朝日がカーテンの隙間をすり抜けてまりやに当たった。

まりやはまぶしそうに寝返りを打った。

自然と十八の顔はゆるむ。

時計を見るとまた遅刻すれすれの時間だった。

急いでまりやをゆすり起こし始める。

「まつりつやつ！ 朝だよー、起きてご飯作ってっ」

んっ、と十八の手を振り払う。

「しょーがないな」

そつと額に口づけした後、十八はベッドから降りた。

カーテンをシャツと開ける。

まぶしい光がいつせいに入り込む。

まりやは数回瞬きを繰り返し起きた。

「おはよお」

ふにやりと柔らかい笑顔で十八を見た。

「おはよ。早くご飯を作って」

「うん。ちょーと待ってて！ すぐ作るから」

髪を手くしでとかしながらエプロンを着ける。

十八はせつせと服を着替え始める。

今日もぎりぎりかなあ、と思いながらも顔がにやけてしまっ

「お父さん！」

目にたつぷりの涙をためて大声で叫んだ。

「十八……『エンジェル』はただの機械じゃないんだよ。

自分で考えて、行動する。考えてごらん？

何故『エンジェル』はヒトの側にいる？ヒトはね、待って居るんだよ」

彼は続けた。

「支えを……愛する人を。側にいてくれるヒトを。待って居るんだよ」

少年は興味がないようにそつぽを向いた。

聞きたくない。

そんなこと言い訳なのだ。

まだ話を続けようとする彼を遮るように叫んだ。

「うるさいっ！」

もう何も聞きたくない。

もうこれ以上彼を嫌いたくない。

耳をふさぐ。

そんなことなんの意味もないのに。

それでも彼は続けた。

「だから、……………」

そんなこといいわけにもならないじゃないか。

『エンジェル』なんて嫌い。

機械なんて嫌いだ。

そんなもののために彼は全てを捨てる。

嫌いだ。

あんなのただの機械じゃないか！

自分で考えるなんてそんなのただプログラムしてあるだけなのに。

機械が本当に人を愛する事なんてできることないのに。

「綺麗なだけじゃないか」

ぼつりとつぶやく。

綺麗な顔立ち。

スタイルだっていい。

でもただそれだけ……………。

綺麗なだけでなんになる？

彼はそんな綺麗な『人形』を作るために死んだのか？

それならとんだ大馬鹿野郎だ。

「どうしましたぼっちゃま？」

「ぼっちゃま言うな。気色悪い」

男はくすつと笑うと頷いた。

少年はうざったそうに男を見てからまた『エンジェル』を見つめる。

「お綺麗ですね、あなた様はお父様がお嫌いですか」

男が笑顔のまま訪ねると。

少年は小さく首を振った。

『エンジェル』を見つめながら口を開いた。

「違う。違うから、嫌なんだよ！」

『エンジェル』が入れられているケースをドンツと殴る。

それでもびくともしない。

彼女は静かに眠ったままだった。

少年はなお殴り続ける。

綺麗な顔はゆがまずただ平然とケースの中にいた。

「……………この方はあなた様のお父様の初恋の方にそっくりですよ。初恋と言いましても旦那様は生涯でただ一人だけを愛し続けたんですけどね」

男は真っ赤になっっている手をなでながら話した。

少年は黙って聞いていた。

「ぼっちゃま、なにがお寂しいのでしょうか？」

「ぼっちゃま言うな」

男は少し顔を驚かせてから笑った。

「そうでしたね」

なでる手を休まず話した。

少年は相変わらず目に涙をためても流しはしなかった。

「あなた様という方がいて、旦那様はさぞかし幸せでしたでしょうに……………」

もちろんわたしも、と男は言った。

\*

「とーや、私……………幸せだったよ」

他人の幸せを押し付けないでくれ。

「旦那様はさぞかし幸せでしたでしょうに……………」

死んだ人のことなんて知らないっ。

あなたの幸せを願っています。

ああ、幸せだよ。

他には何もいらないから。

これ以上俺からなにも奪わないでくれっ！

## 第4章 友達、ともだち、トモダチ

わたしは創られた『ヒト』です。

わたし、アス力は桜城アヤメさまのために創られました。  
アヤメさまは私に容姿と名前をくださいました。

とてもお優しい方です。

他にはわたしに服をくれました。

わたしに喋りかけてくれた。

そう、アス力はアヤメ様のために存在しているのです。

暗い箱の中にわたしはいたのです。

そのときのわたしには名前などありませんでした。

『ドール』といういわゆる『エンジニア』の基本体でした。

そして、たくさんある中のひとつからアヤメさまはわたしを選ん  
でくださいました。

とてもお優しい方なのです。

「アス力？ そんなところでつつたつてなにやってんの？」

「アヤメさま！ なんでもありませんわ」

「そ」

アヤメさまは本当にお優しい方なのです。

『エンジニア』のわたしにさえ優しくお声をかけてくださるの  
です。

だからわたしはアヤメさまのために動くのです。

「アス力、暇なら外行こうよ……暇」

皆さん誤解されますけど、アヤメさまは不器用なだけなのです。

「はいっ喜んでお付き合いさせていただきます」

「んじゃさー天空園行こ？ あそこのクレープ美味いんだよ」

「分かりました」

「…………アス力、その格好で行くの？」

なにか問題があるのでしょうか？

一応この服はアヤメさまのお母様がプレゼントしてくださったものなんですけど。

アス力が着ている服は可愛いふりふりがついた、俗にいうメイド服。

アヤメが止めるのも無理はない。

「では、着替えてまいりますね」

\*

アヤメさま。

わたしはあなた様にいつくせないほどのお礼を抱えております。ですので、もう少しだけお側にいさせてください。

最初、わたしは暗いお部屋にいました。

それはもう闇と呼んでいいほどの暗いお部屋。

でも奥のほうには緑色の光が弱弱しく光っていました。

そして小さい男の子のお声と、男性のお声が聞こえてくるのです。

わたしは残念ながら遠くで聞こえませんでしたですが確かにそうでした。

わたしはその部屋で4、5ヶ月ほどいました。

それから『エンジェル専門店 セピア』に並べられました。

いろいろなかたがいましたが中でも美しく光るガラスケー

スにはいつていた方が一番綺麗でした。

No.777の方です。

アヤメさまにご購入されてからはお会いになりませんがきっとア



ヤメさまのような素敵な方にご購入されていればいいなと思ってお  
ります。

お話を戻しますが、アヤメさまにご購入された理由は簡単に言う  
と『お友達』としてだそうです。

アヤメさまは先ほど言ったとおり誤解されやすい人なのです。  
わたしがはじめてここに来たときはお一人でいつもお寂しそうに  
ご本を読んでおりました。

お声をかけても返事はなさらなかったのです。

でもご購入されて1週間くらいたったでしょうか？

初めてアヤメさまのほうからお声をかけていただいたのです。  
それはもう天にも昇る気持ちでした。

「……あんたアンドロイドなんだって？」

「ええ、そうですよ」

アヤメさまのお声は嬉しそうでした。

前とは打って変わった優しさでしたがわたしは嬉しさのあまりさ  
ほど深くは考えませんでした。

「あんたの顔と名前、私がつけたんだよ」

「それはありがとうございます」

「アスカとアヤメ……似てるでしょ？ 気に入ってくれた？」

わたしはとても優しい顔をなさっているアヤメさまを初めてみ  
ました。

でも不思議と違和感はありませんでした。

ただとてもお美しいと思いました。

「もちろんです。アヤメさま」

そう言うときアヤメさまは笑ってくださいました。

そして、わたしは思っただけです。

ああ、私はこんな優しいお方にご購入されて幸せだと。  
心から思いました。

「やっぱり、アスカならそう言ってくれると思った」  
私はアヤメさまが大好きです。

とても言葉に表すことが出来ないほど。

わたしが思い出にふけっているとドアの向こうからアヤメさまのお声が聞こえました。

「アスカ〱置いてくぞ」

「あー！ お待ちくださいっアヤメさま！」  
いいんです。

いつかわたしがいらなくなったときが来ても。  
いまはまだ、お側にいさせてください。

\*

「十八あつ外行こうよー」

十八は久しぶりの休みということで、まりやにどこに行きたいと聞いた。

「外、て……………んじゃあ天空園に行くか？ お前あそのクレープ好きだったろ？」

十八は当然そうだと思って言った。

だがまりやはハテナマークを頭上に浮かべた。

「そうだった？」

そうか、記憶はまりやが死ぬ2年前のしかなかったのか。  
ということはまりやの記憶では天空園のことは知らない……………ああ  
っ！ ややこしい！

十八は頭をガシガシやりながら言葉にならない声を出す。  
まりやはいまだ不思議そうに頭を傾かせていた。

やっとなつた天空園は人であふれていた。  
覚悟はしていた。

だが、まさかここまでとは……と十八は後悔する。  
後の祭りだ。

「とーやークレープ！ クレープ！」

「ああ、はいはい」

はじめてきたからかすさまじいハイテンションだ。

『はじめて』というかきおくにないだけだが……。

「すいませんーチョコとストロベリーください」

「すいまそん。バナナとクリーム」

台詞がかぶった瞬間というのはなんとも気まずい。

ひょこつと十八の後ろからはまりや、アヤメの後ろからはアスカ  
が顔をのぞかせた。

「どつたのー？」

「どうかいたしましたかアスカさま！」

今日は台詞がかぶってばかりだ。

「はい、どーぞ。チョコとストロベリーのお客様と、バナナとク  
リームのお客様」

さすがアンドロイド。

仕事が早い。

四人が遠慮がちに受け取り、遠慮がちに代金を払う。  
座る場所も自然といっしょになった。

「あのっ」

アスカがまりやに話しかける。

「ん、なーにアスカちゃんっ」

「その………いいえ、あの、クレープ一口頂いておよろしいでし  
ょうか？」

聞こうと思ったことは飲み込んだ。

言ってはいけないような気がしたからだ。

その選択は正しい。

まりやは笑顔でクレープをアスカに渡した。

「アスカちゃんのもちよーだいね」

「はい。どーぞ」

「あいつら仲いいな」

十八が遠めに二人を見る。

もう二人の世界というものだ。

少し切なくなった十八だが、せつかくできたまりやの友だちだ。

我慢しよう。

「ねえ、あのこも『エンジェル』？」

アヤメはクレープを食べながらしゃべる。

「も、てことはあんたのところも？」

「あーうん。そんなところ」

残された二人もちらほらとしゃべる。

もっぱらまりやとアスカのことについての惚気話だ。

「だーから！ まりやは可愛いんだっつーのっ！ 料理上手いし、仕草も顔も可愛いしっ！」

「はあっ！ うちのアスカのほうが可愛いんだっつうの！ 料理なんてもうプロ並みだよ！ あのしゃべり方とか萌えじゃない！」

「節穴っ！」

「趣味悪っ！」

意外と仲がいいコンビ。

十八にいたってはクレープがあるのを忘れて拳を握ってしまつて大変なことになった。

\*

そのいつかがくるまで、あなたのおそばにいらさせてください。  
わたしはもう心の準備ができておりますから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5636a/>

---

機械仕掛けの僕たち

2010年12月17日02時42分発行